

日本自費出版文化賞入選 小堀文一 『^{ていぼう}丁卯生まれ』

「自費出版」という言葉を耳にされたことがあるかと思います。自費出版とは書物を出版する際にその費用を出版業者に負わず、自分で負担することです。個人で自分史や作品集を出版することはもちろん、企業の社史やPR本なども一種の自費出版といえます。毎年膨大な数の自費出版物が刊行され、商業出版物と並ぶ出版文化の重要な担い手となっているのはご承知のことでしょう。

一方で、営利目的の商業出版と異なり、自費出版物は流通機構になかなか乗ることができず、著者の苦心が報いられること、世に知られることも極めて少ないというのも事実です。

しかしながら、自費出版においてもむしろ売ることが目的ではないだけに 真摯な研究結果や売するための虚飾を廃した作品等、すぐれた創作物が多数生まれているはずです。そんな自費出版物に光を当て、著者を讃え、かつ自費出版の再評価、活性化と促進を目的とした賞があるのをご存じでしょうか？

今回は、そんな自費出版文化の振興のために1997年に創設され、今年度第7回を迎えた「日本自費出版文化賞」に入選した作品をご紹介します。小堀文一著『丁卯生まれ』（フジベン

社・2003年12月刊）です。

著者の小堀文一氏は昭和2年（1927）古河生まれ。長い勤め人生活ののち、1991年ごろから文筆活動に専念。平成8年（1996）に短編小説「こおろぎ」で第27回埼玉文学賞を受賞しています。文芸誌『修羅』同人であり、主な著書は、『一族』（夢想舎）『古河の夕映え』（フジベン社）『ある詩人の肖像』（三一書房）などがあります。

この『丁卯生まれ』は埼玉文学賞受賞作「こおろぎ」をはじめ、著者がこの10数年間に『修羅』や埼玉新聞文芸欄に発表した数多くの作品の中から小説6篇、エッセイ・随筆10篇を収録しています。もちろん、「川と十字架」などの古河を舞台にした作品も含まれています。

そしてそのいずれもが好作品ですが、それもそのはず。『丁卯生まれ』は、著者自身が「この十年間、書くことに明け暮れた」と述べているように、10数年の精力的な創作活動を凝縮したともいえる作品集であるのです。

決して派手ではありませんが、古河出身の著者の地道な創作活動が評価されたことは喜びに堪えません。



小堀氏とフジベン社刊「丁卯生まれ」